

日本の国際協力をめぐって

末岡直樹

イオンディライト株式会社

本日は「日本の国際協力をめぐって」という題で話をさせていただきます。

私はこれまで国際協力で3ヶ国に長期派遣されてきました。これから国際協力の歴史的な流れを話した後、初めて派遣された国ヨルダンについて、その後ザンビア、モンゴルについてお話させていただきます。最後に、国際人とは何か、私なりに考えたことを話したいと思います。

時間が限られておりますので、最も力を入れて話すのは中近東についてです。今後、もし世界を揺るがすような状況になるとしたら東アジアか、中近東のどちらかだと思います。東アジアは日本でもマスコミが詳しく報道しておりますので、皆様もご存じかと思います。しかし、中近東については馴染みがないと思うので中近東を中心に話します。

まず、世界の国際援助や日本の国際援助の歴史の話です。日本は第2次大戦敗戦後、主としてアメリカから復興支援を受けました。日本同様ヨーロッパも大戦で社会資本が多く破壊され、その復興支援が国際援助の歴史の始まりであったと考えられています。またヨーロッパ諸国は大戦で疲弊し、植民地経営する能力が衰えたことから、1960年代中心にアジア、アフリカの植民地であった国々が次々と独立していきました。独立したけれどもまだまだ国を運営するための色々な力が足りないということで日本や欧米が戦争の傷跡から復興し、その余力を使って国際協力が発展してきたという流れがあります。

日本の援助の歴史を大ざっぱに述べると、第2次大戦で日本が敗戦、アメリカのエロア・ガリオア資金、また世界銀行から融資を受けて復興してきたという流れがあります。復興により余力ができたことや戦争の賠償のために国際協力が始まったという経緯があります。第二次大戦の直接的な賠償ができた国はビルマとインドネシアとフィリピン、南ベトナムだけでした。他の国々に対してはODAで、本当の意味の国際援助かどうかは分かりませんが、戦争の賠償として国際協力がスタートしました。

その国際協力が1992年に大きな節目を迎えます。1960年代から日本は様々な海外援助を始めましたが、無原則での活動はいかがなものかということから、日本政府はODA大綱を策定し、援助の理念、原則を明確にしました。この年から日本はアメリカをしのぎ海外に対するODAの援助額が1992年から10年間、世界一でした。ただ、1997年のアジア金融危機などの影響を受け、政府の財政がどんどん厳しくなっていき、2001年以降ODA予算を削り、一番多かった年に比べ

現在は約6割程度になっています。それに伴って日本の国際的な認知度が落ちてきているという事は残念ながら今の状況です。

日本人が世界に出ていく時に理解しておかなければならないのは、多様な民族の気質です。科学的な根拠はありませんが、気候が人の気質を作るという俗説が実感できます。例えば、日本人は弥生時代ぐらいから米作りをしています。農耕民族としての歴史を重ねてきましたが、それは湿潤なモンスーン気候にあって米作りに適していて、農耕民族の気質を培って今までできています。横並びで均質な団体行動が得意なところが特徴でしょうか。

ヨルダン、ザンビア、モンゴルというのは、それぞれ民族の気質が日本と異なっています。ヨルダンは西アジアの砂漠気候で水が豊富にないですから、農作物はオアシスカ、川が流れている周りぐらいしかできません。従って、羊の遊牧を中心に生活していて遊牧民族としての気質を持っています。砂漠気候なので、ゼロか1か。後で宗教の話、イスラム教について話をしますが、砂漠気候が絶対的な存在の神、一神教を発生させてきたのだと納得できます。砂漠気候で恐ろしいのは、常にペットボトルに水を持ってないと駄目で汗をかいても流れずに蒸発するので、自分の発汗が分からないことです。突然、脱水症状で倒れることがあるので、とにかく1時間置きぐらいに一口、二口、水を飲まないと非常に危ないです。私も常にかばんの中に1リットルのミネラルウォーターのペットボトルを入れていました。乾燥地帯の高温というのは非常に恐ろしいです。厳しい自然環境にあってそれを支配する絶対的な存在の神に服従しつつ、部族単位で身内を尊重する孤高のイメージがあります。アラブ人は遊牧民の気質と商人の気質があります。中世ヨーロッパ暗黒時代にアラブ商人が東洋と西洋を結んだ貿易を一手に引き受けてきた歴史から、商売人気質も持ち合わせていて、商人の町大阪人氣質と相通じるところが興味深いところです。

次にザンビアですが、南部アフリカの気候はサバンナ気候です。森まではなくて、灌木とかブッシュが生えています。アフリカのイメージ、ケニアやタンザニアなどの国立公園の草原で様々な野生の動物がたくさんいるというイメージがあるかと思います。ザンビアもケニア、タンザニアみたいな草原ではありませんが、ブッシュが密生しています。草原よりも少し木が豊富で、その中に草原と同じようにゾウとか、キリンとか、ヒョウ、ライオンなど様々な種類の動物がいて、非常に自然に恵まれた所です。

サバンナ気候ですと雨季と乾季に分かれていて、砂漠気候に近いですが、砂漠よりは雨が多いということがあります。特にザンビアはザンベジ川という大きな川が流れていて、エジプトのナイル川には及ばないですが、アフリカでは3番目か4番目に大きい川が流れています。そこにヴィクトリアフォールズという滝があって、アフリカで一番大きな滝です。雨季の滝はものすごい迫力です。本当に水量が多い。そういう所なので稲作はできませんが、比較的乾燥した所でもできる農業が行われていて、トウモロコシを栽培し、主食にしています。ケニア、タンザニアのマサイ族が有名ですが、牛の遊牧をしている民族がザンビアにもいて、遊牧民族や農耕民族が交ざっているような状態です。ザンビアでは人口密度が低いので深刻な土地争いが起きにくく、比

較的穏やかな気質の人たちが多いです。自然が豊かなので日本のように多神教的な自然を信仰の対象にするようなイメージでしょうか。

最後にモンゴル。北アジアの砂漠の寒冷気候で、伝統的な生活様式は家畜の遊牧です。家畜は、寒さに強い動物、弱い動物があるので、五畜といって五種類の家畜の遊牧を基本としています。低温異常などの気象災害である種類の家畜が大きいダメージを受けても他でカバーできるよう、バランスよく動物を遊牧します。五畜というのは、馬、牛、羊、ヤギ、ラクダです。家畜の飼育は浮き沈みが大きく、うまくいく年は多くのメスが子を産み、手持ちの家畜数が倍近くになることもあり、一気に財産が増え、こつこつ財を増やしていく農民とは感覚が少し異なるように思えます。また、遊牧は広大な土地に展開するので非常に大らかな気質を持っています。だから、日本人とモンゴル人は見た目が近い東アジア人ですが気質は相当違うように思います。私の経験では、ザンビア人が最も日本人に近い気質のように思えました。

さて、中近東の話に入ります。ヨルダンについて説明します。アラビア半島の付け根にある国で、色々な中近東のニュースなどで首都アンマンが報道されていることも多いです。内戦が激しいシリア、アメリカと戦争して当時の大統領サダム・フセインが処刑されたイラク、サウジアラビア、イスラエルに囲まれた国です。周りは物騒なニュースが流れてきますが、逆に台風の目とこの国でしょうか、ヨルダンの国自体は非常に安全です。但し、全くテロなどがなかったことはなく、外国人向けのヨーロッパ人が泊まるようなホテルが爆破されたというような事件もありましたが、基本的には非常に安全な国です。

特に私が派遣されておりました1992年から1994年まではヨルダンの国王は、先代のフセイン国王でした。そのフセイン国王の仲介で1995年にイスラエルのラビン首相、パレスチナのアラファト議長が平和協定を締結します。これで一旦は、ユダヤ・パレスチナ問題が雪解けとなりかけました。私もその直前まで現地に行きましたから、これから中東の治安がますます良くなっていくだろうなと思っていました。しかし、その後ラビン首相はイスラエルのユダヤ教の原理主義者に暗殺されます。それからユダヤ保守派、シオニストというか、シオニズムの強い政党が政権を取り、今のひどい状況になっています。またアラファト議長も亡くなったというニュースがあって、両サイドそれぞれの抑えの利く人たちが亡くなったの今のような状況です。

アメリカは、テルアビブという商業都市に大使館を置いていましたが、トランプ大統領がエルサレムにアメリカの大使館を移すという表明をしたために、非常に険悪な状況になっています。

中近東と言えばイスラム教ですが、イスラム教とはどういうものを簡単に説明させていただきます。まず、イスラムは一神教です。一神教というのは海外における宗教の中心で、世界的な規模の一神教のルーツはユダヤ教、そこからキリスト教、イスラム教が生まれてきています。それぞれの宗教に聖典がありますが、イスラム教、キリスト教、ユダヤ教の共通する聖典があります。キリスト教の聖書というと皆さんイメージしやすいかと思いますが、旧約聖書、これがユダヤ教ではタナハといいますが、タナハとはタルムード、ネイビーム、ケスビームの3つユダヤ教聖

典の頭文字をとったものです。イスラム教の聖典では、モーセの五書といわれているものです。今説明した3つの宗教の聖典は同じものです。それぞれの宗教は相争ってきた歴史を持ちますが、聖典の一部は同じものなのです。ただしキリスト教においては、イエス・キリスト以降作られた新約聖書を重く用いますし、イスラム教はコーラン中心です。ムハンマドが神から啓示された教えがコーランであるということで一番中心に置きます。共通する聖典は尊重しますが、やはり一番、強調するところ、重点を置くところは少し違うのかなと思います。

神の呼び方ですが、ユダヤ教、キリスト教ともヤハウェといい、イスラム教は、皆さんご存じのアッラーで、同じ唯一神のことを言います。一神教全体の信徒数は30数億人で世界の人口の半数近くがこの一神教の信徒ということになっています。

イスラームという言葉は神様に帰依するという意味があります。イスラム教の起源はマホメットと聞いたことがあると思います。マホメットは、アラビア語読みではムハンマドといい、彼が神から言葉を預かり、それをコーランという書物にまとめてイスラム教が成立しました。ムハンマドはアラブ人のクライシ族ハーシム家または、ハシェミット家という部族の人です。ここで言っておきたいのはヨルダンの正式名称はヨルダン・ハシェミット王国。ハシェミット家、ヨルダンの王様はムハンマドの直系の子孫です。だから、アラブ全体から尊敬されているのです。

イスラム教を信仰する人をムスリムと言いますが、ムスリムはアッラーに絶対的な帰依をして六信五行を実行することが義務付けられています。信仰告白が、五行の一つにあります。「ラーイラーハー イッラッラー」と唱えたら、ムスリムだと認められます。これは「神の他に神はない。唯一の神はアッラーである」という意味です。宗派ではスンニ派とシーア派の二大宗派があります。さらにシーア派が色々なグループに分離していったという歴史があります。シリアで内戦が起きていますが、政権を持っているアサド大統領はシーア派の一つのグループのアラウィ派の人で、少数派がスンニ派という大多数を押さえ付けているのでそのような内戦状態になっている一因です。

メッカというのはイスラム教の聖地ですが、マホメットは、メッカで神の啓示を受けてメディナというところで布教活動を始めたのでイスラム教の1番、2番の聖地です。その後イスラム教を広げていくと共に帝国をつくっていきました。その次にイスラム帝国の中心地となったのはシリアのダマスカスでした。その後アッバース朝が勃興し、イラクのバグダッドが中心に変わり、その後にセルジュークトルコがイスラム帝国の中心になります。セルジュークトルコの首都はイスタンブールです。それから、東方にモンゴル帝国が出現して、西に進出してきます。その侵攻によりイスラム帝国が崩壊します。

イスラム帝国は4つに分裂して、イスラム教の大きなグループの中心になっていきます。現在は、4つ以上のグループですが、1つ目のトルコ地方はオスマントルコからトルコ、2つ目はエジプトのマムルーク朝から現在のエジプト、3つ目はインドのムガル朝、これがパキスタンやバンラデシュに継承されていきます。またインド本体にもイスラム教徒のグループは少し残ってい

ます。4つ目がイランのサファビー朝という形に分裂して、現在に至っているということです。イスラム教の三大聖地はメッカ、メディナ、エルサレムです。エルサレムには、イスラム教では有名な伝説があって、ムハンマドが一晩で一神教の聖地エルサレムに飛んで行って、お参りしてまた戻ってきたという伝説です。それは神の啓示を受けて神の力を受けてムハンマドがメディナからエルサレムに飛んでいったということでエルサレムがイスラム教の第3の聖地になっています。

サウジアラビアの皇太子が最近暴言を吐いて問題になっているのは、現在エルサレムを管轄しているのはヨルダンのハシェミット家ですが、その管轄権をよこせと言ったらしいです。そういうことを言ってアラブ中から輦轡を買っています。

ヨルダンの状況ですが、1992年、私がヨルダンに派遣された時はヨルダンの人口は450万人で、6割がパレスチナ系、4割がヨルダン系といわれていました。2004年の統計ですが、7割がパレスチナで3割がヨルダン系とパレスチナ系の割合が増えました。2009年、イラクのサダム・フセイン政権が崩壊したときの後には、イラクから50万人が逃げてきてヨルダンに避難してきています。イラクのお金持ちが来てヨルダン国籍に変更して多くの投資をしたので、ヨルダン経済はその時期は非常に潤いました。現在に近い2016年人口統計で、ヨルダンの人口は945万人に膨れ上がっていると報告されています。

24年間、四半世紀で倍以上人口増えていますが、一体、何割がヨルダン系なのだろうかと思えます。この950万人のうちの40万人から50万人はシリアの内戦で来た人たちです。イラクから50万人、シリアから50万人がこの10年間にヨルダンにきました。それまでにパレスチナ紛争から長い時間をかけて人口の7割がパレスチナ系となっていて、このような状況だと普通では国が成り立たないですが、ハシェミット家の王様が統治するから国が保てるのです。

私がヨルダンで体験したことについて話します。約四半世紀が過ぎました。青年海外協力隊員として、国立大学のコンピューターセンターで働いていました。ヨルダン人で同い年のスタッフが2名いて、彼らとは非常に仲良しでした。彼らとは一緒に色々な仕事ができ、活動がスムーズにいきました。やはり同い年の人は心易いですね。このうちの1人は日本にJICAの研修生として来て我が家にも泊まってくれて、日本での私の生活も見てくれました。私はヨルダン時代その彼の家にも行っています。本当に仲良くしたお友達でした。現在、彼はかつて働いていた大学の教授で情報学を教えています。

彼の子ども時代が大変面白く、例えば、ヨルダンは2000年前のローマ時代、ローマ帝国の一部でした。ヨルダン人特有のジョークで「俺の先祖はイタリア人だ。」と言うことがありますが、「それ2000年前のことやろ。」と突っ込みたくなります。また、ヨルダンはオスマントルコの支配下になったこともあります。オスマントルコがイギリスに負けてトルコの本国に引き上げる時に沢山の財宝を洞窟とか洞穴に隠して戻ったという伝説があります。それは本当のことらしく、彼が小学生の時に何かわからないが、ほら穴を見つけて中に入ったら金貨か銀貨かが箱に入っていて、いいお小遣いになったと話してくれたこともありました。今でも宝探しする人がいるようで、そ

ういう意味でもヨルダンは大変ロマンある国だと思います。

ヨルダンに派遣されて最初の2週間ホームステイして現地の人の生活習慣を覚えましょうという研修があり、あるアラブ人の家族の家に2週間ホームステイしました。配属先の大学とホストファミリーの家はバスで20分の所だったので、その後もしょっちゅう遊びに行っていました。この家庭は、普通のアラブ人家庭とは少し異なっていてお母さんが外で働いていました。彼女は女子高の校長先生でした。ヨルダンの学校は男女別学です。そのお母さんは、非常に先進的でエジプトに留学経験があり、「ヨルダンの女性が自立できるような技術を身に付けさせたい。」と常々言っていて、学問だけでなくいろんな技術を教えるような活動もされていました。私はこのお母さんを非常に尊敬しています。

この家はヨルダンの有力部族の一つオベイダード家の人たちです。この部族はヨルダンの国王を支えている大臣が出ているような家で、田舎の村の一族とはいいながら名門の一族なので色々な人が出入りしていました。大学の夏休みが1カ月あり、時間的余裕があった時に自分から再度ホームステイして大学に通勤していたことがありました。その時にも色々な人がオベイダード家に来て、ヨルダンだけでなく、その場所はシリア国境の近くだったのでシリアの人もたまに立ち寄っていました。そのためシリア人ともいろいろ話をして、アラブ人の考え方を知る上で大変勉強になりました。

次にアフリカのザンビアについて話します。ザンビアはアフリカの真ん中に位置し、2000年当時、平均寿命が世界一短いと言われていました。それはなぜかということと感染症が原因です。HIV/エイズが南部アフリカでは非常に蔓延していました。それがはびこる理由というのは古くからある一夫多妻制の名残も一因です。一番問題なのは、性に関する迷信です。例えば、配偶者を亡くした時にその配偶者の霊が相手に呪いの霊としてつくから除霊が必要であるというアニミズムの迷信があります。キリスト教を信じていると言いながら、除霊には他の異性と性交渉が必要だということとても危険な迷信であり、その迷信を実行する人がいるものですから、誰かがエイズで死んでその配偶者と性交渉してどんどん広がっていったらもう、社会が滅茶苦茶になります。

HIV/エイズの蔓延で多数の人が死んでいる状況だったのですが、最近少し状況が変わってきています。近年、ワクチンが開発され、HIV/エイズの広がりを抑制する非常にいい薬が沢山出てきています。その特効薬を南部アフリカの対象者に配ることによって死亡率が下がってきています。ただ感染者数自体は一定数いるので、その人たちを今後どうするかということが、重要になると思います。

ザンビアのもう一つの課題は中国の浸透です。もともとザンビアという国は1964年10月26日に独立しました。これは前の東京オリンピックの閉会式の日です。開会式のときは北ローデシア共和国という名前で参加していたのですが、閉会式のときはザンビア共和国という名前で閉会式の行進に出ていました。そのため、閉会式に出場した他国の選手たちから祝福されている映像があって、これを覚えている方もいらっしゃるかと思います。

1925年にザンビアで銅鉱山が発見され、イギリスが本格的に植民地化したのは銅が豊富だったからです。今でも銅が輸出品の中心です。従って、100年間近く銅の輸出だけで国を運営してきた、どれだけ銅鉱脈があるのだろうと言うような感じですが、1970年～1990年ぐらいまでは日本がザンビアの銅の最大の輸入国でした。一時期、昭和50年前後の10円玉の半分はザンビアからの銅でできていたという逸話があり、日本国内の電線の半分もザンビアからだと言われていました。日本が利用している銅の半分がザンビアからの銅を使っていたという経緯があり、今も20数ヶ国に及ぶJICAのアフリカ支援のうち、第3位の支援額です。日本政府はザンビアをそれだけ重要視していますが、徐々に日本がザンビアの銅を使わなくなっていく中、日本の存在感がなくなってきています。その代わりに入り込んだのが中国です。現在、ザンビアの銅鉱山の所有権をかなり中国が持っていて、以前は南アフリカの会社やヨーロッパの鉱山会社が銅の採掘権を持ち、採掘をしていたのですが、今では中国人の支配下に入って、労働条件が非常に悪くなり、事故もより多発するようになってきました。それでザンビア人は大変怒っています。銅の他にも石炭が出て、石炭の採掘も中国人がきちんと後始末をしないものですから、年々環境汚染がひどくなっていき、中国人の石炭炭鉱の支配人が殺されたといった事件も発生しています。私がいたちょうど2000年から2002年の間のことですが、赴任した2000年の時の中華料理店は首都のルサカに2軒しかなかったのが、2年後の2002年には30軒位に増えていたのです。どうしてこんなに中国人が増えたのだろうかと思います。

ザンビアの輸出入の2015年の統計データがありますが、輸出国一覧での輸出金額比率で中国が17.9パーセントを占めています。実は2015年の10年前、2005年での輸出先第2位の位置には、日本がいました。だから10年間でザンビアの輸出国の順位が変わっています。このようなことで今、ザンビアにおいては日本の存在感が非常に落ちています。日本が今、ザンビアに何を支援しているかという点と感染症対策とか教育関係の分野で支援していますが、道路を造ったりとか、鉱山を支援していたりした方がインパクトがあります。本当に日本人の存在感が落ちていて残念ですが、こんな状況です。

3番目の派遣国、あまり時間がありませんので、モンゴルの交通輸送事情と日本との関係についてお話させてもらいます。モンゴルの道路は、首都ウランバートルから北は舗装道、南は未整備です。それはなぜかという点と中国との微妙な関係があります。中国の侵攻に備えてロシアからの援軍が展開しやすいようにしているのです。従ってウランバートルに中国軍が来る前にロシアからの援軍が来て守れるようにということで、北の地方の道路しか重点的に整備していません。そのような備えをしています。

モンゴルの鉄道は、シベリア鉄道の一部をなしています。ロシアのモスクワからバイカル湖周辺、シベリア地方に来て、モンゴルを横切って中国の北京まで行っています。現在、モンゴルの資源を輸出するにはシベリア鉄道しか、安定した輸送路がないので、中国に抑えられている現状があります。そこで今、ロシア極東地方に支線を設けようとしています。これはロシア国内だけ

を通過して日本海側の港に行くように造り、完成すれば中国を経ず、より独立した形でモンゴルの資源を輸出できるからです。そのようにしたたかなこともしています。

モンゴル出身の関取が色々話題になっていますが、なぜモンゴル人はあんなに強いのでしょうか。それは子どものときから馬に乗っているため、足腰がものすごく丈夫になるからです。モンゴルの代表的な伝統競技は、3つあります。それは、競馬と弓と相撲です。モンゴル式相撲は夏のお祭りで全国大会を開催します。大相撲の横綱白鳳関のお父さんは、モンゴル相撲史上初めて全国大会を連覇したこととモンゴル人で初めてのオリンピックメダリストとなったことで国民的英雄として尊敬されています。オリンピックではレスリングで銀メダルを取っておられます。

競馬については、モンゴル人は大人になると皆相撲取りのような身体つきになり、競馬で騎乗すると馬がつぶれてしまうため、子どもが騎手になることが多いです。モンゴルの競馬は30キロとか50キロという長距離を走りますので、子どもでないと馬が持たないということで、子どもは必ず馬に乗れるよう仕込まれます。だから、足腰はすごく強くなります。乗馬で鍛えたバランス感覚と筋力で日本の相撲界に出てこられたら、日本人力士は太刀打ちできないだろうなと思います。

先日、酒席でのモンゴル力士を巡る事件がありました。モンゴル人はわれわれ日本人と同じで、アルコールの分解酵素がない人が多く、すぐ酒に酔っばらってしまう人が多いです。悪酔いするのだから酒を飲む人が多いです。酒に弱いのに飲んだらどうなるのか、あのような事件が発生しやすいということになります。私もモンゴルにいたときに酔っばらいに殴られたり、強盗に襲われたりとか酷い目に遭っています。酔っばらいに近づくなというのが在留邦人の合言葉でしたが、自分も飲んでいてつい忘れてしまいます。2回ぐらいけがさせられて病院行きましたので、非常にモンゴル人の酔っ払いは怖いです。

もしモンゴルに旅行される方がいらっしゃったら、酔っばらいたいな人がいたら絶対に近づかないようにして下さい。

それから日本との意外な関係では、第2次世界大戦後、日本人が捕虜になってシベリアへ拘留されましたが、ソ連だけでなく、中央アジアのモンゴルとか、カザフスタンとか、そのような所にも連れて行かれています。日本人捕虜が何をやってたかというところ公共施設や道路建設です。オペラハウスとかドームとかを日本人が造った。私は2005年から2006年にモンゴルにいましたが、そのときでも戦後すぐに造った建物が、びくともしていない。モンゴル人が当時造ったその他の建物は大体全部崩壊していて、もうありません。日本人が造ったものは品質が素晴らしいとの一言に尽きると思います。

最後に国際人とはなんだろうかということについて、私なりの考えを話します。まず、訪れた国の人たちが、その国を発展させてきた歴史があるから、常に敬意を持って接するようにすることが大切です。それから向こうの人たちと話をするとき、その国の歴史が分からなかったら話

ならないです。特にヨルダン周辺国の人たちとはローマ時代あたりのことから知っておかないと相手にされない場合があります。だから必死でヨルダンの歴史を勉強しました。また色々な場面において現地語で話すことは重要でした。ヨルダンにいる時はアラビア語、ザンビアにいるときはニャンジャ語という言葉、モンゴルではモンゴル語で極力話すように心がけていました。特に買い物に行くときは注意しました。向こうの言葉であいさつして買い物して、頻繁に顔を出すこと、日本から来たんだよと話すこと。そうしていると、ほられないです。もし日本で外国人が外国語で話しかけたら、日本人は律義ですから買い物なんかでも、ほる店員はほとんどいないですが、外国では平気であります。海外でサバイバルするためには現地語を絶対に身に付けないと駄目だと思います。本当に必要な最低限の単語は覚えないといけないと思います。

あとレストランに行くとき非常にばらつきがあります。店選びに失敗する 때가っかりしますが、家庭料理はどの国でも大変おいしいです。ヨルダンでは、派遣当初アラブに慣れるためにホームステイ体験をしました。そこで向こうのご飯がおいしいことに気づきました。日本食が恋しくならぬくらい、アラブ料理が大好きになりました。また、モンゴルにおいても現地のレストランはいま一つの味でした。当時モンゴル語学習のため家庭教師を雇っていましたが、モンゴル語の先生の家庭に出入りして、その家庭でいただくモンゴル料理はとてもおいしかったです。それからザンビアもそうでした。レストランに行って、さほど美味しく感じられないことが度々ありましたが、その場のありあわせで作る田舎のお母さんのご飯が、大変おいしかったことが多かったです。途上国では、家庭に入り込んでその料理を食べないと、その国の本当の味が分からないのではないかと思います。

そして重要なことは近所の子どもたちと仲良くなることです。どの国でも子供たちは、偏見なく外国人でも話し掛けてくれます。現地語であいさつし、現地語を話すとすぐに寄って来ます。子供たちとコミュニケーションをとっていると自分の語学力も向上するし、現地の大人とも仲良くなれるので、近所の子どもは大事にしないといけないと思います。それから、現地に溶け込むことが重要です。もし仲良くなれた家族があれば、そこの家族の一員になりきる。私は三つの国でそれぞれ家族と呼べる人たちがいました。そのように現地に溶け込んでいくとすごく暮らしが快適になります。そのようなことを実践できる人が国際人なのだと思います。

